



ドイツ民衆文芸の歴史について — 研究資料・編訳：
ドイツ民主共和国・ベルリン科学アカデミー・歴史
学—民俗学中央研究所 ヘルマン・シュトロバハ
「ドイツ民衆文芸史」序文—

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂西, 八郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/800

ドイツ民衆文芸の歴史について

ドイツ民衆文芸の歴史について

-研究資料・編訳：ドイツ民主共和国・
ベルリン科学アカデミー・歴史学 - 民族
学中央研究所 ヘルマン・シュトロバハ
「ドイツ民衆文芸史」序文-

坂 西 八 郎

Geschichte der deutschen Volksdichtung Übersetzung aus dem Buch:

„Geschichte der deutschen Volksdichtung“
(Hrsg. v. Hermann Strobach, Akademie
Verlag 1981, Berlin)

Hachirō Sakanishi

Abstract

This paper is a translation from the preface of the following book: *Geschichte der deutschen Volksdichtung* (ed.: Hermann Strobach, Akademie Verlag 1981, Berlin). My main reason for translating it is to introduce the author's way of thinking to Japan. The author, Hermann Strobach, has outdated the standpoint of the idea of the "Grundschrift"; he proposes a new thought: the creative of the people in the "Grundschrift" is also the most important moment for the development of the formation of the variations in the field of "oral tradition". Predominantly there has been an fixed idea of *jōmin* (people in the "Grundschrift") in Japanese folklore. And there is no clash with the classic image of *jōmin*. I hope that this translation will raise earnest discussion about it.

1). - 1. 歴史的研究をばむ二つの原因
-とくに「基層」論について-

ドイツ民衆文芸の端緒から現代にいたるさまざまな発展傾向について、歴史的な概観を一卷本におさめてみた。われわれには本書を最初の試みにとどめるつもりはないし、またそれも許されぬであろう。ドイツ民衆文芸の歴史的研究をするために必要な資料の状況をみてみると、15世紀中葉まではわりと密度のたかい文献があり、中世中葉までは価値のたかい個々の証拠文献がかなり多くあり、またきわめて少ない証拠文献をもってではあるが、われわれは中世初期までさかのぼる。けれども個々のジャンルの歴史、またとくにドイツ民衆文芸全体の歴史をあつかった総合的論述はほとんどない。いままでの歴史的研究はもっぱら個々のテキスト、テキストのタイプ、あるいはテキスト群の変転を問題別に研究することを目標にしてきた。個々の地方の伝承を歴史的に比較することも、いまだなお十分に注意をはられないままである。

その原因はおもに二とおりあったとおもわれる。まずとくに後期ブルジョア的研究においては、民衆芸術および民衆文芸をなすものは、ほとんど変ることのない「基層」の実体であるという観念が支配的であった。このような見解は歴史的研究をほとんど促進しなかった。

民衆の伝承のなかの散文やうたの伝承が、しばしば何世紀にもわたり保持されてきたのは事実である。それにもかかわらず不変の諸伝承ということは考えられないことである。諸題材、諸タイプは多種多様できわめて長期にわたり保たれうるが、その表現内容と形式はつねにかわってゆくのである。民間伝承の全文化財は継続的な変化にさらされる。その結果どれをとっても互いにちがう個々のテキスト型が無限に生ずる。さらにまた諸題材と諸タイプも歴史的伝承過程であらたに生じ、あるいはあらたに民間伝承にとりあげられ、そして多くのものがふたたび消え去ってゆくのである。民衆文芸の社会的・文化的機能もおなじように歴史的な変化と発展にゆだねられる。時代を個別にとりあげてみた場合、ある一つの時代における民衆文芸の社会的・文化的機能は、ことなる

階級と社会層のもとにあっては非常にちがうし、さまざまな時代全体を通じてみた場合にもおなじことがいえる。たとえば民衆文芸の濃密な歴史的伝承がはじめてわれわれの手にとどく15世紀と16世紀初期の資料をみよう。これによればこの時期には、うたと物語りの伝承、箴言財やさまざまな言語・詩形式に形づくられた人生経験が、農村と都市市民のわりとひくい階層の精神文化の重要な構成部分となった。それにたいしてその頃すでに都市市民中間階層、とくに手工業組合や同業組合の親方たちと小商人たちにとっては、これにくわえて文学的な題材やその造形が重要となった（たとえば職匠歌人のうた）。ものを読む力がますます拡まるにつれ、すでに16世紀には都市市民中間層のなかで、のちには下層のなかでも、そしてとくに19世紀以降にはついに農村住民のなかでも、人びとの精神文化における民衆文芸の伝承ジャンルへの関与はますます後退した。そのかわり一方でさまざまな異なる由来と種類をもつ読み物が登場した。また民衆文芸の個々のジャンルも、内容と形式のみならず、そのもつ社会的意義という点でも歴史的にかわってゆく。19世紀におけるドイツの口頭による物語伝承をとってみると、童話および宗教的伝説は後退し、笑劇伝承と一般むけのコミックな娯楽もののジャンルとタイプが優位を占めてくるという特徴がみられる。童話のみならず、たとえば多くの歌謡群についてみると、とくに19世紀と20世紀の初頭には、成人の世界から児童たちの世界へと移っていったということが知られている。伝承はますます口頭・記憶伝承ではなされなくなり、書物でなされるようになり、今日では文字と技術を駆使した媒体によって広くなされている。そのため民衆文芸ないし民衆文芸のある一定のジャンルの保持者も伝承形式もかわる。それゆえ民衆文芸は、つねに変らない単一の構成物とはみなされえない。それは歴史的に発展する、多様に構成された、そして多層的な現象なのである。

歴史的につねに変化するテキスト内容とテキスト形式が莫大な量に達すること、また社会的・文化的な関連や機能がきわめて多いこと、このことが歴史的な総合的論述にあえてとりくもうとする人がまれにしかあらわれないことや、このような仕事は時期尚早の企てだとたびたび言われる第二の原因となる。

- ii . 歴史的研究所の困難性

事実どのような試みも、つまり民族的・国民的伝承における民衆文芸の総体を歴史的に分析し論述しようとするどのような試みも、ややこしい問題の前に立往生する。これらの問題のすべてを概略的にせよ論ずることは不可能である。とはいえ民衆文芸の歴史的論述を理解いただくため、とくに重要な三つの問題領域について二・三の所見をのべることにしよう。

2). 典拠資料の問題性と方法論

まず典拠資料の問題がある。これは歴史的・民俗学的研究と論述など、いずれの研究のはじめにもある問題である。この典拠資料の問題は、三つの言葉をもって特徴づけることができる。すなわち豊富さ、欠除性および信憑性。第一は、歴史的資料のほとんど使いこなしきれない豊富さ、第二は、この豊富さにもかかわらず集めた資料には欠落性があること。第三には、使用に供せられる資料の大部分には信憑性がないことである。

いずれの分析と論述も問題としうる資料の全体に関係をもとうと試みるであろう。しかし最後にはいつも、使用に供される証拠文献の全体のなかから必然的になされるべき選択に基礎をおくことができるだけである。この選択の基準が、歴史的論述のさいに、とりあつかわれる対象の歴史的発展因子を決定するにちがいない。この因子が発展の傾向と方向をきわだたせることを許す。こうした手続きによって成立した歴史像は、民衆文芸にふくまれる個々の諸現象が現実には多様であることに比べ、貧しい。この多様性も民衆文芸には近似的に掌握され再現されているにすぎない。けれども一方では、さまざまな現象の多層性と多様性にもかかわらず、歴史的発展の決定的一般的特性と傾向をあきらかにすることに成功すれば、この歴史像は現実より豊かであろう。だから結局は、資料をあつかう困難性が問題なのではなく、方法論が問題なのである。これについては、ここに吟味すべき第三の問題群にふくめてのべることにする。

3). 資料の定量化とその問題

豊富な資料を自由に使いこなすために、定量化の方法の適用についていろいろに論議され、一部はもはやすでに導入されている。将来定量化の方法は「拒否されえないであろう。なぜなら莫大な量の原典資料がますますデジタル化され、パンチ・カードに収められ、コンピューターの表やプログラムにくみこまれるからである」。だが定量的方法にたいする価値評価は、絶対的な懐疑から過剰な期待におよぶ。こうした極端な考え方のゆれの原因は、歴史的・民俗学的意識過程の内部における定量的方法の位置が不明なことである。この位置を正確に決定することができるためには、定量的方法が以下の4点にのべることを前提としているということから出発しなければならない。

1. 歴史的・社会的現実と学問的認識の到達した状態によって決定される課題・問題設定。
2. 方法的に定量的分析におきかえうる学問的にたしかな理論。
3. ひきつづき資料批判の伝統的方法が必要な現存する典拠資料の批判的精選。
4. 研究されるべき対象に関してすでにえられた知識の批判的な考慮。

その結果、定量的方法は万能薬でもありえぬし、価値に中立あるいはイデオロギーに無関係でもない。むしろ定量的方法はモデル設定ないしコンピューター処理の外にある理論的・方法論的原理に基いている。定量的方法にあてられる場が補助学の場合とされることはきわめて明らかである。この役割りのなかに定量的方法の価値があり、将来は確実に利用度がたかまるであろう。しかしまたこの方法の限界もある。豊富な資料がこの方法の助けをかりてよりよく概観されうるであろう。この資料の豊富さそのものもまたむつかしい問題でありつづけるだけではない。ますます多くなる資料の量を技術的に処理しうる可能性があり、これはより総括的になる原典の領域、典拠資料を包括してゆくと

いう傾向をつよめる。この傾向は、とくにいづれの総合的論述の構想のなかにもすでにあらかじめ存在するが、それは必要な一般的言明をできるだけ大きな典拠基盤によって証明するためである。

4). 資料の欠落性

同時に典拠資料の欠落性も歴史的研究につねに付随する問題である。現実には生きている莫大な量の現象のなかのほんの一部が学問によって捕捉され手をくわえられうるのがつねのことであるから、この欠落性はまずすべての民族学的・民俗学的分析の根本的にもつ困難な問題である。たとえばある一定の地方と時代の民謡の大河の溢れるような豊富さをもった、実際にうたわれたうたのヴァリアツィオンのなかから、最大の努力をして収集活動をおこなっても、ただ例歌、いわば抽出調査的資料しか捕獲されなかった。これはいわゆる「コンテキスト」についてもなおさらあてはまることだ。つまり社会的および文化的諸関連の全分野についてあてはまる。その全分野の場にはある任意のテキストが歴史的・具体的に存在するけれども、この事実ははじめからすべての研究に認識をたすける原理として入りこみ、相応な原典批判的、分析的装置を要求し、その結果、一般化する言明が獲得されうる。たとえば(民俗学) 地図作成はつねにこの課題と対決し、解決のための重要な方法論的基礎を獲得した。さらにくわえて第二の限界が生ずる。これは - 歴史的に制約されるのであるが - 収集と研究の方法と目標設定のなかにある。ドイツ民衆文芸にかんする証言の収集は、ゲーテがヘルダーの影響によって1770年エルザスでおこなった民謡の初期の記載以降、豊富な典拠をあらゆる地方であつめた。これは、ある一定の地方の、ジャンル別の、またテーマ群による、あるいは個別の歴史的時期の、または一般的な、と銘うたれる民謡集や論文の無数の刊行物となっている。さらに広範囲にわたる手稿の資料がとくに民俗学アルヒーフによって把握されている。200年にわたる、部分的には集約的な活動による内容豊富な意義のある収集にもかかわらず、資料はやはり欠落があり、非統一的で、その信憑性の点ではさまざまである。

5). 加工された資料と資料収集の一面性および不統一性

まず多くの伝承テキストと伝承メロディーがとくに印刷された民謡集に手をくわえられた形で再現された。この加工は、個別テキストを損傷から修復することにはじまり、原テキストの復元の試みまで、さらに往々にして断片として保存されている記載にまでおよぶ。しかも編著者が過度に創作の手をくわえるということが、学問的であることを要請される出版物においてすらある。

また収集者は、自身のそのおりの民衆文芸観に照応して、しばしばただ一定の断面、かたられ、またはうたわれた文化財の実際上の一断面に関心をもつだけであった。つまりその文化財は「古い」のか、「真なるもの」とみなされるのか、あるいは一定のジャンル、たとえばバラード、また風習とむすびついたうた、童話など。収集者の先入観のため、とくに印刷された刊行物にあっては、春歌は極度にさけられた。さらに大ていの記載では、語りとうたの文化財の機能、伝播およびこの文化財を保持する社会層すら記入されていない。地方的収集もまたきわめて偏している。かなりおおくの地方、たとえばアルペン、または幾つかの低地ドイツ地方などは他の地方よりも根本的に集中的に研究された。個々の地方の内部では、収集活動はほとんどもっぱら農村か、ときにより小都市にむけられることもあった。大都市または中都市はほとんどふくまれなかった。

この多かれ少なかれ組織的にくだてられたすべての研究と収集は、さらにくわえて本質的に収集者や研究者の社会的な位置や政治的立場により影響をうけた。この影響は、とくにドイツの19世紀中葉以降における諸収集に作用し、反政府的なうたや物語りの文化財、あるいは労働者歌曲や散文伝承は、ほとんど記載されなかったか、記載されたとしてもほんのまれである。さらに語る人、うたう人は収集者に照会された場合に、既成の社会組織やその制度やイデオロギーに対抗するか、国家によって禁じられている物語り・歌謡財をさしひかえた。

欠落性と信憑性の問題は、一部は以上にのべた形で存在する。しかしまた他

に、手書きか印刷された歌集、ピラ、年代的記録、文学的作品などや、またその他の典拠資料、すなわち無自覚的な収集・研究活動に由来するというよりも、実目的をねらった資料などをもちいるさいにもちあがる。ドイツ民衆文芸の歴史的研究のために、われわれが、重要ではあるが長い間完全には理解しつくしていない、しかも比較的古い時代の典拠資料の在庫をもっている、ということはすでに指摘されている。とくに15世紀中葉以降はさまざまとなる種類の手稿が、また16世紀初頭以降になると、印刷された歌集、単独の印刷物、文学作品なども、民衆の物語・歌謡財を大量にわれわれに伝えてくれる。もちろんこれらの典拠すべてについて顧慮すべきことは、これらは決して記録にとどめるためや、いわんや学問的問題設定にしたがって作成されたものではないということである。このことはとくに明らかに歌謡財について言える。通常、収集者と出版社はかれらの歌謡財を直接的な使用か商売目的のためあつめるか印刷したのである。手稿も印刷物もほとんどいつもその一部には民衆間にうたわれていた歌曲を載せており、他の資料もまた載せている。他の一部はもっぱら市民や都市に関する典拠資料で、都市と都市周辺の歌謡財のみを伝えている。これらの資料によっては、全地方的・農民的諸伝承は歴史的にみてきわめて僅かしかカバーできないし、全体を掌握することはむづかしい。このことは15世紀後半の有名な手稿集についてもあてはまる。すなわちロハーマー歌集からはじまり、クララ・ヘツレリンの手稿歌集、そしてロシュトッカー、グローガウワー歌集にいたるまで。また、原典を提供する信頼性のたかい形というものではなく大い芸術的に手をくわえられ、16世紀の市民的作曲家（フィンク、ラオ、オトマイアー、フォルスターなど）の作品のなかに、当時流行した歌謡財が存在し、われわれのまえにたち現われる。

物語財についても状況は似ている。たとえば年代記、実務冊子、教会の戒律集などにおいて、民話の題材が歴史的事件のイラストにそえて再現された場合、その民話の文章は大い個々バラバラな偶然的なものであった。テキストは、一定の民衆層における、それぞれの伝承の伝播と機能についてはほとんど何も語らない。しかし大い形式も内容も報告者や編集者により変更をくわえ

られ、年代記報告や教会文書などでは書記や委任者の立脚点から、支配勢力のイデオロギーの利益にそって解釈されている。状況がいくぶんか好いのは滑稽話・笑劇の場合である。16世紀と17世紀の収集は、無数の民衆文化財をふくんでいる。しかしここでも伝承はつねに文化財と混合し、通常は文学的に手をくわえられている。

6). 資料の妥当性についての問題

もっとも重要でありながら、その一部はきわめて困難な、そしてしばしば完全に明確には答のえられない原典批判上の問題が、これらの歴史的資料をあつかう場合にはある。それは、これらの伝承資料のなかで、何が一般に伝播し、あるいはある一定の社会層や一定の地域で実際に伝播し、そしていかなる形式をとっていたのか、確定できないということである。だが流布していた同時代のできるだけすべての典拠の比較をすることやまた民間伝承の後の時代の記載の助けをかりて、予見どおりそれ相応の結論をひきだすことができる。いかに注意ぶかくそのような結論がひきだされなければならないかは、バラード伝承を参照しただけでわかるであろう。あらゆるドイツのバラードの圧倒的な数を、われわれはヘルダー以来、農村の伝承からあつめてもっている。けれどもこのことから、ドイツのバラードが歴史的に農村・農民的民衆文芸のジャンルに入るという結論をひきだすことはできない。ドイツのバラードの発生を後期中世の都市的關係のなかに求めるべきであろう、という見解もある。事実、伝承された歴史的典拠資料は、このテーゼを支持する。けれどもこの歴史的典拠資料は教育施設から入手したものであり、それもほとんどまづ都市の文書伝承に由来する。バラードは、おそらく僅少量とはいえ、まだ支配的であった文字を媒介としない農村の伝承を包括したであろう。われわれは結局、テーゼと資料状況が最終的には同じであるような環のなかにいる。これはまた、原典資料を引受けただけでは、発生と伝承問題の判断に十分な基礎すら提供できない、ということの意味する。内容に関連するテキスト解釈がこれにくわわらなければならないし、これが断定を可能にする。たとえドイツのバラードが都

市市民に由来するというテーゼが正しいことがわかったとしても、いままでの典拠資料は、やはり何時・いかにしてバラードが農村に移っていったのかということについて、正確な歴史的言明をあたえはしない。

7). 補助的資料ということ

物語り、うたなどのテキストについては、はるかに広範な領域にわたる他の種類の典拠資料が考慮されなければならないということを簡潔に指摘するのにとどめよう。物語りとうたの出現およびその機能に関する重要な証言を、同時代のさまざまな文書、年代記、風土・旅行記などは提供する。禁止令、警察令、検閲令、説教、世俗歌の批難が書かれている宗教冊子などもまた民衆間に生きた物語り・歌謡財の重要な解明をあたえる。15世紀にいたるまでの全中世について、間接的な証拠、たとえばあるうたを禁ずる規則や禁止令、とくに教会の委員会などによって発せられたるものなどは、ほとんど唯一の証拠文献であった。これが民衆の歌謡-、箴言-、物語財に関するきわめて僅かな-しかもつねに批判的な吟味をうるべき-情報を提供しうる。すでにヘルダーは年代記や類似の歴史的文献の意義を指摘した。アルニムもブレンターノもこうした文献類をいちじるしく評価して「魔法の角笛」にもちい、この文献類からテキストをとりだしたか-しばしば大きく手をくわえて-編集した。ヤーコブおよびウィルヘルムのグリム兄弟は、「ドイツ民話」の大部分を同じような文献をもちいて創作した。民衆文芸のテキストをもちいるというこの資料の利用の仕方には、以後ながい間こうした典拠資料がくみこまれるおまな形になっていた。やがて次第に、また多かれ少なかれ散発的に、人びとはこの文献を民衆文芸の生産や機能、そして伝承条件の認識のためもちいた。組織的な利用はやっと最近になって大きなアルヒーフ（文書館ないし研究所）や、国際民俗音楽評議会の研究グループがはじめた。ここには広大な研究領域が開けていて、民衆文芸の歴史的の研究のための大量の資料がある。未印刷の、これから発見されるべき手稿集、あるいは比較的古い印刷されたる抜萃などの出版と解釈がすすむにつれて、歴史的論述のための資料的基盤は改善されるであろう。欠落のない

歴史的な資料基盤などというものは、それにもかかわらず絵空事である。したがってどんな歴史的論述も現存の典拠資料の限界を勘定に入れなければならない。そして資料の言明が堪えうる能力と結論にたいして相応に安全策を講じ、はっきりとさせておかなければならない。

8). 資料をもちいる側の立場

—資料のもつ社会的機能の発見—

典拠資料の性質と、第二の、方法論的課題とは関係がある。ドイツ民主共和国の民間伝承研究はとくに集中的にドイツ民衆文芸における民主的で革命的な伝承を研究することに努力をかたむけてきた。ヴォルフガング・シュタイニッツは、1945年以後のドイツ民主共和国における民俗学研究のあらたな組織にさいし、この課題を設定した。かれはまた自身、有名な民謡集「6世紀間における民主的性格のドイツ民謡」のなかで、このテーマの論述にとって最も重要な刊行物を入手している。一連の広範な出版物がこれまでこの道標となった作品にひきつづいて著わされた。ドイツ民衆文芸の歴史的な総論を試みた本書では、この民主的および革命的諸伝承が民衆の伝承の全関連のなかにくみこまれた。このような企てにあたっては、民衆文芸のなかにある社会批判、社会的な不満と告発の問題をあつかうこと自体が一つの社会的機能の問題となる。テキストの社会的言明は、非常に異なる程度に、またまったくさまざまな異なるやり方でなされうる。階級の対立するさまざまな社会における社会批判の言明をふくんだテキストは、支配的な不公平な関係、抑圧と搾取にたいする不満、そしてこの関係にたいする告発を媒介するものである。ある一定の状況と関連においては、そのおなじテキストは一般的な気分の表現としてのみ使われるか、または社会的娯楽のためにうたわれるか、語られる。他面、それ自身としては全然明らかには社会批判を強調していないテキストも、ある一定の状況のなかでは抑圧された大衆の社会批判を表現し、大衆蜂起の発火信号にさえなる。これに関しては歴史的に証明ずみの諸例がある。一般的にいて妥当する方法論的原理としては、社会批判・不満と告発は、むしろテキストに機能をあたえ、

ある一定の歴史的・社会的現実にたいする機能的関連として、そのときどきの伝承の担い手によって理解されうる。

9). 保守性と変化性

ところが歴史的典拠文献においては、民間伝承のなかで記載された機能についての指示はまれにしかない。われわれがアルヒーフや出版物で自由に使用できる資料のほとんど大部分は、ただテキストの記載である。特殊な分析がはじめてそのテキストの社会的機能の認識えと通ずる。そのための重要な -しばしば唯一つ可能な- 補助手段は、民間伝承におけるテキストの保守と変化の調査である。一例をあげて明らかにしよう。

非常に美しいドイツのパラーデの一つとして、すでに15世紀の文献がのっている二人の遊び友達のうたがある。その初行の多くは次のごときものである（-以下に直訳）。

二人の幼な友達がいた、
二人は散歩に行った。
一人は元気で、
いま一人は泣きくずれている。

（シュタイニッツ「6世紀間における民主的なドイツ民謡」第1巻。ベルリン 1954年。182頁）

内容は以下のとおり。一人の「少年」、若い男が、金持の少女か貧しい少女かのどちらかと結婚をする決定をしなければならなくなった。かれは、愛している方の貧しい娘に決めた。もちろん社会的な考慮からであることは大事な点である。16世紀のテキストは以下のごとくである。

そして金持ちも財産を食いつくせば、
愛も終りだ、

わたしたちはまだ若く強い、
働いて大いなる富をえようじゃないか。

(アムブラーザー歌集 1582年。ベルクマン編。シュトゥットガ
ルト 1845年。53番 47頁)

この歌謡には自負心が読みとれる。ドイツにおける宗教改革と農民戦争、すなわち初期市民革命によって造りだされたあの世紀に、都市の手工業者-市民階級にふさわしく現われた自負心である。

19世紀に由来するあたらしいテキスト型においては、この社会的傾向は特徴的な変化をしている。すなわち、

そしてわたしはお金持の娘を去らせ
貧乏な娘の方に心を向ける
わたしたち二人はまだ若く強い
わたしたちはもう食ってゆけるだろう！

(エルク・ポエーメ「ドイツ民謡集」 第1巻。ライプツィヒ
1893年。第70番C)

ここではもはや、到達可能なる人生の目標に備いすることは、16世紀のテキストにあるごとき「大いなる富」ではない。二人の若い人間の希望は、仕事によって共同に暮し、生活の基礎を創りだすことはできる、ということにある。

このテキストのヴァリアティオンは、バラードが他の貧民的・プロレタリアートの層、あるいは農村で使役されている層へと移行していくことに照応している。そこではいまやかれらの実際の生活状態や生活の希望がうたに現わされている。テキストが歴史的・具体的に变化した社会関係にそのように順応してゆくことから結論がえられる。つまりこのテキストは伝承の過程で現実をたいする関連を保持し、そしてテキストの言明に妥当する社会的機能をはたした。この種の分析を基礎として、伝承された民衆文芸の社会的機能と諸機能一

般を歴史的に理解し論述しようとすることができる。

10). 民衆文芸理解の方法的態度 —弁証法的構造と過程の把握—

ここで結論的にもっとも困難なる方法上の問題になお二・三の覚書を付したが、それは民衆文芸の即応した理解と論述ということである。民衆文芸は、社会的・文化的生活の領域に属すが、その内部では多様な形態をとり、矛盾にみち、歴史的にもさまざま異なり、矛盾にみちて発展するものである。民衆文芸はまず何といってもさまざまな種類の多くのジャンルによって構成されている。このジャンルはさまざま異なる構造、機能、運動の経過をともなう。すなわち歌謡、民話、童話、諺、笑話など。そして第二に民衆文芸は全体としても各ジャンルにおいても、またもやたがいに関連し、相互作用をなし、たがいに影響をあたえて変化をおこし、たがいにことなる発展をたどるところの個々の諸経過、諸過程、諸現象、諸要素などの多数から構成されている。伝承された資料をあつかうときいつも係わりあう題材、タイプ、個別のテキストは、あるものは何世紀以上にわたりゆっくりと次第に変化し、あるものは急激な変化にさらされている。また長期にわたり民衆文芸のなかに生きつづけているものもあれば、短命のものもある。さまざまな歴史的時期にかなり明瞭に登場するが、他の時期には民衆文芸の全レパートリーにおいて形を結ばない、というジャンルやタイプとも関係する。民衆文芸の歴史的発展は、かくて連続性と非連続性の弁証法的経過をたどる。すなわち、何世紀にもわたっての題材、タイプ、機能の恒常的な変化と保守の統一において。またジャンル、テキストにあらわれる内容、あるいはかなり強く、あるいはかなりゆっくりと変化するテキストの機能、および様式などの関連と区別において。また同時に、すべての時代と、すべての歴史的時期における勤労する階級と層の民衆文芸にあっては、つねに同時的・多層的な構造が問題となる。—少なくともわれわれが典拠資料をもつようになって以降は、それは風俗習慣に結びついたものから社会的娯楽のための物語り、うた、諺にまでいたる。またさまざまな内容上、審美上の主

張をもったテキストや、共同で、あるいは一人でうたうたもふくむ。

民衆文芸の歴史の論述は、ゆえにそのときどきにあらたに発生したタイプ、テキスト、テキスト群の知識をえようとするのみではない。民衆文芸の歴史では、小部分は発生史であり、はるかに優勢なる部分は民衆文芸の活動と伝承の歴史である。あらたに生じたテーマ、題材、タイプ、ジャンルの年代的順番は、民衆文芸の歴史的現実に対応した記述を生まなかった。そのような記述を試みたいならば、むしろ「並べること」や「順次にすること」の弁証法に気をつかうことを試みるべきである。しかるのちに、歴史的発展過程において、生きつづける諸伝統と革新の間の弁証法的交互作用がなされたのか否か、いかなるジャンル、歌謡群、題材が生じ、何が消え去り、何がつよく発展したのか、他が変化し、何が相対的に恒常的に保たれていたのかなどについて問うべきである。

ここで問われる理論的- 方法的課題は、構造と過程の関係である。構造的な観点と動的な観点を統合的に結びつけることは、あらゆる歴史科学的認識におけるもっともむつかしい課題の一つである。まず民衆文芸はその全体として、個別ジャンルであろうと、個別のうたのタイプであろうと、おなじくまた各個別のテキストのタイプであろうと、たがいに関係している多数の諸要素が複合し、からみ合ったものとしてわれわれの前にたちあらわれる。つまり民衆文芸は、社会生活の、ある一定のやり方で構造化された領域としてたちあらわれる。われわれはこれらの資料をその資料のもつ関連にしたがって関係づけ整理する。発生的に依存しているものを諸タイプに接合し、モチーフ（動機）間の諸関係を確立し、たがいに違うものを違うタイプ、題材、モチーフに区分けする。要するにわれわれは、タイプ、ジャンルなぞの諸構造をうる。結局ある任意の時点の民衆文芸の全構造をうる。この仕事によって、諸要素やその関連はつねに変わるものであることがわかる。民間伝承の現実を模写する実際の資料のなかに、運動が優勢なものとしてあらわれる。ゆえに構造と発展を歴史的現象の対立する規定として考察することは、方法的なあやまりである。むしろ社会的諸現象はつねに発展する構造として存在する。伝承された資料の全体

性のなかに、動力となる要素と固定を保つ要素、優勢な要素と劣勢な要素など、現実のなかに存在する弁証法的な交互作用とその諸関係を、運動する構造として、事実即して模写することに成功するならば、民衆文芸の歴史的論述は、はじめてなされる。これはもちろん抽象を要求する。入手された全資料はただ基礎であって、歴史的論述の内容ではありえない。それどころか、分析と記述がはじめて実際に資料の歴史的な解明、つまり発展を究明し論述するものであり、あたえられた事実から歴史的傾向、歴史的諸法則をつかみだす。

11). 部分性と全体性

そのための基本的な前提として、次の事実に注目しなければならない。すなわち、社会的現実性のいかなる領域にも、つまり文化のいかなる分野にも、絶対的な独立性、さまざまな種類の部分領域の絶対的な自律性というものとは存在しないのである。それどころか、すべての部分領域と現象は全社会の全体性のなかに秩序づけられている。何重かの多種多様な相互依存と相互作用の関係をなすこの秩序は、かなり多くの連結項によって媒介されていることはたしかである。しかしながら全社会の全体性、その構造・および発展の諸関係と法則性がつねに最終的な決定的判断をくださるのであって、それによって個々の社会的領域の構造の- および発展の関連と運動形式の具体性が決定される。結局その根拠は、社会的生活の諸現象はそれ自体のみによって存在したり、あるいは運動するものではない。すなわち民衆文芸は決して「民衆文芸」、つまりそれ自体のため、またそれ自体によって発展する事物ではなく、すべての歴史は、「自らの目的を追求する人間の営為以外のものではない」のだ。しかしながら人間は自身の目的をたがいに孤立して追求する。その歴史的構造のなかで一定の社会的諸領域が最終的に優勢を占める。直接的にあたえられた諸事実が法則的に構造化され、そして運動する社会の全体性のなかの特殊な関連において考察されるならば、民衆文芸の研究は歴史的認識という結果に到着する。社会的全体性は、すべての社会層のなかでも、またこの社会層の相互のあいだの関係においても、対立しつつ、つねに運動し発展する社会的な基本構造をもつ。われ

われの考え方によれば、社会全体のなかのすべての部分領域は、結局は生産力と生産関係の弁証法によって決定される。「この弁証法との関連において、経済的、政治的、イデオロギー的形式と領域における階級関係の全体が発展する」。その帰結として、われわれは資料が媒介するすべての事実を構造、運動、上記の社会的基本構造の認識などとの関連において観察することができるし、しなければならない。この社会的基本構造をわれわれは経済的社会構成とよんでいる。この -すでに述べたごとくたいていは幾重にも媒介された- 関連において、はじめて事実は歴史的なものになり、事実の比重は測られ、評価をうける。この関連において社会的生活の何らかの領域の歴史的事実の本質がはじめて認識され、人間社会の構造と発展における法則的なものの要因となる。

12). 位置価 Stellenwert の概念

こうして民衆文芸の歴史的な機能・運動・発展、とくにその諸条件と諸原因は、結局はそれぞれに具体的歴史的な社会的基本構造にたいする関連によって説明されうる。その方法的な手掛りとして、われわれのもちいることができるのは「位置価」の概念であろう。民衆文芸とその部分領域、すなわち個別ジャンル、テキスト群、テキストのタイプなどのそのつどの位置価を、文化と社会の全過程のなかで決定し、社会の全構造とその発展にたいする関係において、この位置価の変転を跡づけるように歴史的論述はこころみるであろう。これによつてはじめて発展の諸傾向は認識可能となり、また発展傾向はその諸条件の省察によつても説明可能となろう。具体的な研究と論述における、この方法的諸原理の実践的実現は、もちろんまだまったく複雑であり、問題は山積みとなっている。これは現実の研究活動とそのつど必要な論述方法において、つねにあらたにためされ、解答されなければならない。しかし問題の解答ということでは、われわれは民間伝承のまったく初歩にいる。とくにこの理由から、本書「ドイツ民衆文芸史」は、はじめての試みの一つという性格をもっている。

13). 民衆文芸における並起・継起, 伝統・革新と保守・変転

民衆文芸は、歴史的分析のしめすところによれば、つねに「並起」と「継起」の、また伝統と革新、保守と変転によって特徴づけられていた。いかなる時代においても、われわれが民衆文芸史のための典拠資料をもって以来、伝統的な要素とあたらしい要素は並んで存在したし、また同時にともに変転をとげ発展してきた。この問題は、現代に目を向けると、民衆文芸は死滅するのか、あるいは、変化した諸条件のもと、おそらく完全に他の諸形式において実現をみる発展傾向のさまざまな可能性をもつか、というインターナショナルにおおく論議されている問題にいたる。われわれの論述は、現実の歴史的発展によって決定されるべきこの問題をすでに解決しよう、とは要請しない。けれどもこの問題を自らに課し、あたらしい過程を注目することによって、問題を指摘しおきたい。

14). ドイツ民衆文芸を考えるドイツ社会主義の立場

それゆえ、われわれの論述のための本質的な出発点をなすのは、次の認識である。歴史的な過程にある社会主義社会の、変化をとげた生活方法と向上した教育水準および恒常的に発展する勤労人民の社会的および文化的意識は、文化的生産性と文化遺産を獲得する可能性と能力において、質的にあたらしい段階にいたった。この基礎のうえに伝承された民衆文芸は変化した位置価をうる。階級の対立するこれまでの社会においては、革命的プロレタリアートの文化運動創出の以前には、民衆文芸は民衆の優勢の多数、すなわち搾取され抑圧される階級と層が言語・芸術的領域においておこなう創作活動と文化生活がほとんど唯一の表現であった。それにたいして社会主義社会においては、搾取と抑圧から解放された勤労階級と層は、かれら自身の文化的諸伝統そのものを教養財と文化的遺産として採りあげ継続する。勤労人民は民衆文芸のなかに、生活と芸術的創造の証拠を、また階級対立社会においてなされた、人民大衆の何百年にもわたる自由と公正のための格闘の証拠をみとめる。この証拠を勤労人民は

自らの階級意識を豊かにし、積極的な文化活動をおこなうためにもちいる。このことがとりもなおさず歴史的過程の構成要素となる。この過程において、勤労人民の自ら創造する芸術的活動は、労働者階級、その党、また発達した社会主義社会の教育・文化施設を基礎とする大衆組織の指導によって、国内および国際的な専門的芸術と緊密にむすびついて、歩一歩と展開する。それゆえ民衆文芸の発展の傾向と諸形式について論述するとき、必然的にあつかうべきことは、社会主義的な民衆芸術の創造およびこれが民衆文化の歴史的伝統にたいしてもつ関係、そしてその質的にあたらしい、特殊な個性などにみられる萌芽と要素である。

15). 本書の主眼点

この理論的および構想的観点から出発し、本書の論述で努力したことは以下の点である。

1. ドイツ民衆文芸を文化的現象として論述し、その特殊な発展傾向を、歴史的に変化する社会的諸関係を基盤とし、かつ全文化の発展にたいする関係において解釈する。
2. 民衆文芸の諸現象においてみられる継続的な発展をとりあげる。これは、文化における、また言語・詩作上の自己活動というあたらしい形の姿をもつところの、資本主義社会組織とそこにある支配的文化にたいして、労働階級と他の勤労階級と層がなした闘いにおいて到達したものであり、またさらに社会主義社会の建設のなかで到達したものである。
3. 諸ジャンル、内容、タイプ、題材、機能と形成方法などの多様性と歴史の変転を提供する。これはドイツ民衆文芸の歴史において、はじめから現代にいたるまで創出され、展開され、一部はまた消え去った。

4. 階級対立社会における生活の困難なる諸条件のもとでなされた、このドイツ民衆文芸の歴史の道における、民衆の創造的活動を評価し、この創造的文化的活動の歴史的に限定された可能性と限界性を評価する。
5. ドイツ民衆文芸の発展を諸民族間・諸国家間においてみる。

言うまでもなく、この構想的観点をわれわれの研究状態を基礎にして実現するためには、多くの問題が未解決である。たとえば、民衆文芸に関する民族間・国家間の関係はいまだなおほとんど研究されていない。この関係は本書ではただしばしば展望として、そして一般的な関係として暗示されうるだけである。少なからざる歴史的時期、おおくの専門分野、無数の課題群（とくに美学上の問題）が、われわれによってはまだ手をつけられていない。また他の問題では、ほんの部分的成果にとどまっている。とくにこれは歴史のもっとも早い時期と現代の過程について言える。ながい歴史的時間にわたる、民衆文芸のごとききわめて多層的な構造物の論述をしよう、しかもポケット版として構想された本におさめようというのであるから、歴史の初めから現代までの発展傾向の記述と説明は、梗概にとどめなければならなかった。著者たちはこの論述の不充分さと缺落を自覚している。ドイツ民衆文芸の歴史的過程に関する情報は一般の人々には欠けている。しかし民衆文芸の諸伝統にたいする社会的関心は増大し、情報に対する需要が多くなっていることに直面して、著者たちはすでに現在到達した研究状態にもとづいて、歴史的概観を執筆し、公衆に委ねる気になった。著者たちは、批判的指摘を感謝をもって受けいれ、次版が刊行される改訂のさいには良心的に利用させていただくであろう。

索引は読者を助けるであろう。横断的な連携を探しだし、異なる歴史的時期における一定の現象とジャンルの記述間に、たがいの関連をつけることができよう。付録の精選文献目録は、重要文献である民謡集と研究活動を歴史的に記録し、学徒と興味をもつ読者にたいして、ドイツ民衆文芸、またかれらが関係する民衆本と大衆文学の一層の研究のために指示をあたえるようにしてある。

ドイツ民衆文芸の歴史について

本としての完成のため、一定の領域ごとに資料と参照指示が役立てられ、そして相応する文献目録が作成された。ウルリヒ・ベンツィエン（なぞ）、ヨハンナ・ヤエネッケ（呪文、祝詞、誓文）、ハイナー・プラウル（大衆文学）、フリードリヒ・レートリヒ（諺）、アンネリーゼ・シュミット（民衆本）が担当者である。ヘルタ・ウールリヒは文献目録と注釈の通読をもって著者をたすけ、また索引を作成してくれた。インゲボルグ・ミュラーは校正刷りを読んでくれた。著者たちは、ドイツ民主共和国・科学アカデミー・歴史学中央研究所・文化史・民俗学部門の同僚たちから、かなり多くの価値ある指摘をうけた。御支援と共同の仕事をしてくださったすべての方に、心より御礼申しあげる。

（昭和60年5月21日 受理）